

教育長	部長	課長	係長	係

第 7 回 会 議 録

会議名	知立市文化芸術推進会議
-----	-------------

令和4年9月28日	開催場所	知立市図書館 視聴覚室 10時00分～正午
出席者・委員	清水裕之、宇納一公、近藤博子、戸谷田知成、三宅隆弘、松崎保義、大橋直樹、野口実佐子、永井淳子、川上陽子、David Hunt、岡松良典 (藤澤幸兄、稲垣英男、越智さや香委員は欠席) (敬称略)	
事務局	寺田教育部長、中野文化課長、近藤課長補佐、新庄主事、中川主事補	
<p>1. 開会</p> <p>2. 挨拶 あいさつ 清水会長</p> <p>3. 委員等紹介 新委員、新事務局員の紹介</p> <p>4. 議事 清水会長 議事進行</p> <p style="margin-left: 20px;">(1) 知立市における文化芸術活動の状況 について</p> <p style="margin-left: 20px;">(事務局から説明)</p> <p>意見交換</p> <p>会 長 : 事務局からの提案もあり、資料3をもとに重点的に審議をしていきたいと思う。 まず初めに、重点施策1「子どもが様々な文化芸術に親しむことができるまち」について。</p> <p>戸谷田委員: 重点1については、ターゲットがまさに子どもというものもあれば、幅広い世代に見ていただきたいという中で子ども向けのものも含んでおり、色々と織り交ぜた内容を記載した。 層別に「この事業はどこを目指しているのか」をもう少し見える化したほうが、例えば子どもについても「この層」についてはまだ手薄ではないか等、もう少し見え</p>		

る化できるのではないかと感じた。幅広い世代に来てほしいという意味で記載した事業については、子どもの層がなかなか来てもらえなかったという反省点もある。そういった事業を本当にここに挙げていいのかどうかというところは不明だが、挙げるにしても、子どもに来てもらえるような展開を伴ったかどうかというところが今後の課題だと感じた。

まとめますと、層別で細かく検証してもいいのではないかとということと、果たして本当に子どもに届けるための事業展開となりえたかということが課題だと捉えている。

会 長 : 幅広くターゲットを広げているようなもので、例えば7番「愛知県立芸術大学オペラ 2021 関連企画リハーサル鑑賞」は子どもという視点についてはどのように取り上げているのか。

戸谷田委員: 具体的に招待の対象となったのは、市内の中学校の吹奏楽部や刈谷市内の中学校のオーケストラ部。層としては、中・高生がターゲットになっている。

会 長 : どのくらいの人数が参加されたのか。

戸谷田委員: 今回は学校行事の関係もあり、市内の中学生が数名という状況であった。ただし、これは数年前から継続してやってきた事業であり、多い時には100名近い方に来ていただいたこともある。どうしても公演の日程に合わせた設定になるため、学校のご都合に合わせられない場合もある。

会 長 : その他、課題についてご意見いただけないか。

永井委員: 公演に参加する際、小さい子どもに限っては、親御さんが一緒に行かなければ当然一人では来られない。小中学生は学校でのクラブ活動等があるが、全体像として「小さい子どもから鑑賞できる」という広い門になっているという捉え方がまず1点できると思う。

小さい時に親に連れられて一緒に行った文化芸術は、その子どもが大きくなると、自分の子どもを連れて行こうとする流れに変わってくると考えられる。

今までは小さい子どもには敷居が高かった文化芸術も、近年、このように気楽に鑑賞できるという環境を作っていただいたことで、数年先、今の子どもがもう少し大きくなった時に、自らの意思で行けるような、興味が変わってくる時代が来ると思う。

今取り組んでいただいている問題はきっと後々に変化が大きくなる。こういった活動を続けていくことで、知立市の子どもが大人になった時に興味の範囲が少し変わってくるような点が発揮されるということではないだろうか。少し長い目を持たないと、この成果ははっきり見通しができないのではないかと感想を持った。

会 長 : まさにその通りだ。その他に文化協会、リリオコンサートホールはどうか。

三宅委員：昨年度からちりゅっぴが出演する公演を始め、徐々に子どもも増えつつある。小中学校にはチラシを配布させていただいている。また、料金を安くしたうえで、曲や内容も子ども向けを全面に出すような公演を始めたが、やはり小学生以上の方が多いのが現状。

昨年度はそのような状態だったが、今年度から、パティオとリリオ合同の夏休み企画ということで、景品をつけたスタンプラリーイベントを行った。今年度初めての取り組みで実績は思うように出なかったかもしれないが、来年度以降も継続していきたい。

会 長：このスタンプラリーは、具体的にどのぐらいの数の子どもの参加したのか。

三宅委員：具体的な数字は出ていない。実績としては、こちらが想像したぐらい。予想した以上ではなかったが、来年以降も続けていきたい。

近藤委員：毎年8月に行われるよいとこ祭りについて。ここ3年間は中止だったが、今年は櫓盆踊り大会を行った。各町内、子どもがたくさん出てくれた。コロナの数も増えていたが、それでも3年ぶりということで皆さん参加してくださった。先ほども意見があったが、「経験」はその子の一生の中で大事なものになっていくので、イベントはなるべく潰したくない。その子が大人になってまた自分の子どもを連れてくる家族もあると思う。

何かの企画をするために人を集める方法を考えるが、それに伴ってどのようなことをしたらよいか。そういったところを皆さんの知恵を出し合ってやっていくと活性化すると思う。私たちに何ができるかを考えて、いい政策を取り上げていくと、知立の子どもたちがいずれ大人になってからでも推進会議の内容が活かされるのではないか。

会 長：もっとこうしたらよい、という具体的な案はあるか。

近藤委員：先ほど紹介があった、パティオとリリオの合同チラシにも掲載されているが「知立の踊りを覚えよう」という講座が夏にあったが、3人しか集まらなかった。やはり人の集め方が下手だったので、集める方法は学校にお願いをするとか。来ていただけるための方法を来年からはもっと考えていこうと思う。何か講座をやる以上、集客方法を考えなければいけない。

会 長：学校行事に重なってしまうなどの問題があるかもしれない。文化会館も同様の悩みがあるのではないだろうか。

戸谷田委員：今回は合同チラシという形でのPRになってしまったため、個々の行事の内容が浮かび上がらなかったということも1つ反省点だと感じた。

次年度はこういった合同チラシも作りつつ、個々の事業についてもPRしていく必要があるのではないかと考える。

副会長 : 何点か確認したい。

- ・ 1点目、資料1の4頁⑦「歴史文化体験教室」について。現時点では今年度含めて予定はないとあるが、これはぜひ取り組んでいただきたい項目だと思っている。現状、何か検討はされてるのか、またはいくつか候補がでているのかお聞きしたい。
- ・ 2点目、多文化共生の施策について。具体性が感じられない。特に外国人に対する投げかけはするのだろうか、実際に次にどう進めていくのかがわかりにくい。
- ・ 3点目、学校の方では今、教員の負担を軽減するというような方向であるが、やはり文化芸術についても、積極的に取り組んでもらいたい。音楽や美術含め、充実することは難しいと思うが、それをサポートするのが、本日いらっしゃる文化会館さんなど。あとは、それ以外の個人や小さな団体もある。そういった人達を活用しなければいけない。そういう方向についても、市や学校の方に投げかけていかないと大きな打開ができないのではないかと。そこについては大橋先生からアドバイスしていただきたい。
- ・ 4点目、資料には文化会館やリリオといった施設が出てきているが、町の活性化で活動されてるグループについては出ていない。例えばライオンズクラブやロータリークラブなど地域貢献されてる団体もあると思うが、そこについては今後どのようにしていくのか。
- ・ 5点目、これは要望だが、パティオのアトリエをもっと活用・充実していただいて、子どもたちに無償で解放していただけるようにしてほしい。

会長 : 副会長には全部の枠の中で課題をお話しいただいた。

まず初めに重点施策1を議論し、それから順番に重点施策2～5を続けていこうと思っていたため、まず子どもに関するところを議論させていただいて、後ほどその他の話題を忘れずに議論させていただければと思う。まず、3点目にあつた学校教育の関係。

学校の教員負担等で、学校のクラブ活動含め様々な状況がある。学校だけでなく、地域全体で色々な団体・個人等の活用というものに対してどう考えるかが重要といわれている。その辺りについて議論いただきたい。特に、学校のクラブ活動を地域で引き受ける「地域文化倶楽部」の推進というものを文科省が出しており、大きな話題になってきている。そのことを含めて、学校教育の立場からお聞かせいただきたい。

大橋委員 : 月に1回定例校長会があり、その都度文化課長から、公演内容等を学校で子ども達に伝わるように案内してほしいということを知るが、どれだけ子ども達に伝わっていくかという点が大事だと思う。保護者においても、市内の回覧板等も含めて情報が少し滞ってる所がきっとあるだろう。学校としてやれることで、もう少し校長会のほうでも、いただいたチラシを機械的に流すだけにならないよう進めていきたい。

ここからは個人的な意見だが、先ほど近藤委員からも話があったように、どのようにして人を集める工夫をするかというところの中で、勿論伝統的な文化も大事だが、それだけではなく、子ども達に関心が高いようなところも見つめ直していくことも大事

ではないだろうか。そのような意味で、1つは、子どもたちが今欲しているものは何かを考えること。勿論そればかりでは駄目だが、「不易と流行」という所で不易だけでもいけないし、流行だけでもいけないところがあり、そういった部分が変わっていきるとよいと思う。

次に、学校の負担が増えているという問題について。

限られた時間の中で、社会から求められるものをやっつけようと思うと、とてもじゃないが不可能である。年々ベテランの先生が少なくなり、その中でも最近では若い方に教員は人気が無い。成り手が少なくなっていく中で、私たちの現場も構造を変えていかないといけない。

そのような中、「コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）」という発想がある。今までは学校が全て受け持つ・何でもやるというような仕組みであったが、これからは、この事務は学校がやるが、それ以外のことは地域とともに行うという構想に変わってきている。

知立市は来年度以降本格的に進めてく予定だが、今まで教員が行っていた部活動も含めて、地域の人或いは技能を持った人とタッグを組む、そういうことを可能にするのがコミュニティ・スクールだ。地域とともに学校を運営していくということ。そこにはコーディネーターという方がおり、どこのサークルの誰に音楽を教えに来てもらう等、その方を中心に学校の要望を実現していく。

知立市としては来年度以降の動きだが、自分の学校としてはやれる範囲で進めていこうと思って動いている。例えば、パティオやリリオにコンサートを鑑賞しに行くなど。そうすることで、子ども達にとっても少しずつ文化芸術に対しての敷居が低くなると思う。自分自身、子供の頃から今に至るまでそういった施設へ行って、芸術を鑑賞するという生活をあまりしてこなかった。多分そういう人は多いと思う。そこを近づけるためには普段の学校教育の中でリンクしながら進めていけるとなるとよいと考える。学校教育課も含め、連携しながらやってくることが重要だと感じている。

会 長 : この話は、行政として、文化会館などの施設を含めてどういった連携を取ればよいのかを重点的にご検討いただけるとありがたい。

もう1つ、5点目にあったパティオのアトリエ無償開放はどうか。

戸谷田委員 : すぐにやります、とお答えできないのは歯がゆいところである。様々な選択肢の中で今できることをやっているのだから、今の段階としては、今後の課題とさせていただきますという回答になってしまう。

会 長 : さきほどのコミュニティ・スクールの件で、行政の方に少しお願いをと言ったのは、仕組み作りのネットワークとマンパワーの問題。要するに人をサポートするためのスタッフをどうするかという話で、地域の人々をどう組み立ててサポートをしていくかということに対する仕組みづくりをぜひお願いしたいと思う。そういった意味で、例えば文化会館のスタッフが全部やるのではなくて、パティオウェーブやヤング・パティオウェーブの方たちが無料でクリエイティブなことをやれるような仕組みも

立ち上げたらよいのではないか。

戸谷田委員：ヤング・パティオウェーブについても、当初はフロントの業務と参加した事業の鑑賞というところでやってきたものを、今は希望があればその他のセクション、例えば広報で情報誌を作る等、そういったところに参加する子も少しずつ出てきている。

あと1つ、パティオ登録アーティストについて。川上委員にもご参加いただいているが、そういったアーティストバンクもあるため、そういった方が指導者として活動の場となるような機会となるのであれば、ご協力いただきながら展開していくことができるのではないかと考えている。

会 長：様々なネットワーク作りを知立方式としてうまく作り上げていただけるとよいと思う。

次に重点施策2の「知立市の山車文楽とからくりの継承・活用」について。
文化課（事務局）のほうから説明をお願いします。

近藤補佐：65番「義太夫お試し教室」という講座を数年前から行っている。知立の山車文楽の上演には、人形遣い・語り・三味線の方がいるが、高齢化して後継者がいないという課題がある。後継者育成の観点から、保存会の方にご指導いただきながら挑戦してみようという講座である。講座を継続していただいて、お祭り等で語りや三味線を披露したということで、ある程度成果がでていると思う。また、知立市外の方も参加してくださっており、豊田市の参加者の方が、新たな保存会での上演に成功したということでも一定の成果が得られているのではないかと考える。反面、新しい受講者が減ってきているということもある。工夫をしていかないと続いていかないと感じている。

戸谷田委員：文化会館ではここ3年間かけて新作の文楽作品を作っており、保存会の有志の方々に実際に舞台に上がって上演をしていただいている。そして、それを通して参加している保存会の皆さんの上演技量の向上も図っているという面もある。しかし、どうしても高齢化で新しい人材の加入が追いつかないということもある。市で義太夫と三味線の教室をやっているので、次年度、文化会館の方では人形遣いの講座を開講し、新たな人材の取り込みの機会となるような場を作っていく予定である。

もう1つ、知立まつりの本祭り（隔年）で行われる知立神社での奉納上演が1番の舞台だが、それを文楽からくりの専用ホールとも言われる花しょうぶホールで年1回に5ヶ町揃って披露していることも継続している。そういったことを通して、文化会館としてはこの分野に貢献していきたい。

David 委員：ここ3年間知立まつりがなかった。子どもたちに知立まつりを知っているかと聞いても、誰も知らなかった。それが1番悲しいと思っている。毎年やらないにしても、何とかして子どもたちに伝えていかなければいけない。

中野課長：先日、秋葉まつりは開催した。ただし、これは市民には一切通知をせずに伝統継承というような形での開催になった。知立まつりに関わる人たちも、やらないと山車の組み方等も継承できないので、ぜひやりたいという気持ちではいる。コロナ次第。

大橋委員：知立中学校で教頭をやっていた時に、山町の方からよく声をかけていただいていた。そこで、山車文楽をやってみたい人を募集したら 10 人近く生徒が集まったので、練習を月 1～2 回して、最終的には鯖江市まで行って、上演を行ったということがあった。

このように、大人と一緒にやっていくようなシステムを作っていくことがよいと考える。先ほどのコミュニティ・スクールと兼ねるが、地域と学校がお互いの要望をうまく連携させながら進めていくと、伝統継承も上手くいくのではないかと。子ども達も、特にやりたいことはないけれど実際にやってみたら案外面白かったとか、人間関係が広まって自己肯定感が上がったとか。そういった効果もあるのではないだろうか。

David 委員：竜北中学校の山車文楽部も現在人数が少ない。

永井委員：誰かやりたい人はいるか、と声をかければやってみようかなと思ってる子は必ずいるはずだ。

川上委員：話が前後するが、「知立の踊りを覚えよう」の講座参加者が少なかったとのことだが、チラシ中、その隣にある「三味線を演奏しよう」はどのくらい参加者がいたのか。

戸谷田委員：定員が 6 名で、定員いっぱいになるくらいであった。

川上委員：個人的に音楽活動をしてる上で、チラシはすごく大事なもの。最初にチラシができて、宣伝が始まる。しかし、今はチラシだけではお客さんはなかなか集まらない。実際若い世代が主として活用してるのは SNS。イベントに参加しようという時には、やはり親御さんのイニシャティブがないと難しいと思う。

個人的にもいつも集客には頭が悩ませてる場所であるが、今の時代ツールがたくさん出てきているので、何か違った発想があってもいいのではないかと感じた。せっかくいい企画がある時に参加者が少ないというのはとても残念なことだ。

会 長：次に重点的施策 3 「障がい者の文化活動の機会の充実」について。
具体的に取り組みが少ないというのが大きな課題だと思う。

戸谷田委員：ここで挙げさせていただいているものもあるが、それ以外に例えば一般の公演であっても、車椅子席は全ての公演に提供している。ただ、ここに挙げたのは障がい者をメインターゲットにした事業、ということをまず補足させていただきたい。
そういった意味では 7 4 番「パティオ DE クリスマス」というものはどなたでも来てくださいという事業。通路を広く取る等の配慮をしているということである。

75番「バリアフリー演劇」は社会福祉協議会と並び主催という形でやっている。昨年はバリアフリー演劇ということで、東京演劇集団「風」さんが、舞台上で手話通訳者がその役者と一緒に演じたり、字幕や音声ガイドつきで、聴覚・視覚に不自由のある方も舞台上での展開を理解できるものであった。

この事業は、障がいのある方もない方も一緒に鑑賞していただくということが狙いで、鑑賞サポートが必要ない方も一緒に鑑賞している。また、リングCさんにもご協力いただいている。

76番「こどもアートふれあい事業」については、近隣の支援学校の方にも機会を提供しているというところで挙げている。コロナ禍で中断しているところもあり、安城の支援学校については、このところ映像鑑賞という形の提供になってる。

79番「草の根フェスティバル」については実はメインでやられているのはリングCの永井委員。コロナ禍前の先回の第25回の開催を花しょうぶホールで実施し、以降文化会館で実施ということになっている。

永井委員：草の根フェスティバルについてはリングCがメインで行っている。

重点施策3の中で読み取れるものは、「どんな障がいの方も参加できる」という企画と、76番のように「こちらから出向く」という企画。そして、私たちの草の根フェスティバルに関しては「障がい者を知ってほしい」というのがもう1つ入る。企画をしているのが障がい者団体というのが大きな特色。

昨今、令和元年以来コロナで中止していたが、やはり中止すると忘れられてしまう。そう痛感した。知立まつりも知らない方がいらっしゃるということだが、1度も知立まつりを見たことがないと当然親も知らない。その中で子どもが継承していけるはずがない。

私たちも続けることに意味があるということをお大切にしている中で、2年も中止になってしまった。今年は12月3日に開催する予定であり、現在企画を進めている。その中でもう1つ思うのは、中止が続くと、企画する側のやる気が損なわれるということ。それもとても大きいことだと思う。やはり継続するということは大きな力である。それと同時に、このコロナ禍を踏まえて、新しい取り組みとして何を考えたらいいかということも、日々皆と考えている。

それから、私たちが企画する事業の中では手話通訳・字幕・要約筆記等がある。様々な障がいを全てクリアするのはものすごく大変なことだ。それを全てクリアするバリアフリー演劇にお友達を誘って見に行った時、「こんなにいろんなことをやらなければいけないんだ」と驚きを言われたことがある。私はそこが1つの狙いだと思う。

というのも、障がい者にとっては万全を期したつもりでも決して万全ではない。耳の聞こえない方で手話があればいいかということ、手話を取得していない方もいる。本当にありとあらゆるものがある。こういった物があるのだ、というのが根付いていくことが大切と思う。

知立まつりもそうだが、そのような思いや気づきが継承されていかないと途絶えてしまう。

300人近い団体だが、頑張っているのだから、行政側も他の団体の方たちも、続けてい

うという思いを強めていただきたい。

最後にもう1つ。文化会館さんとの共催を得られたことで、私たちは発想が膨らみ、様々な団体との連携を図ることがすごく大事だと感じた。私たちが行うものは、福祉課や社会福祉協議会等の福祉関係の事業と重複することが多い。同じものをあちこちで行っても興味が分散するだけで、その辺りを連携して1つのものにまとめてより大きなものにできるといいと考えている。また、長寿介護課や健康増進課とも連携していかねばという思いもある。連携ということも1つ課題に入れていただきたい。

会 長 : 文化会館が連携の核になるだろう。

戸谷田委員 : 限られた中ではあるが、できることはやっていきたいと思う。

会 長 : 次に重点施策4「文化芸術を通じた多文化共生への試み」について。

102番「多文化子育てサロン」について。どれくらいの人に参加しているのか、場所はどこでやっているのか。どれくらいの効果がでているのか。

事務局 : 持ち帰って確認し、後日回答する。

戸谷田委員 : いわゆる多言語対応については会館のホームページや、会館パンフレットなどの展開がある。また、付随するものとして、外国人に向けた市の広報物や、そういったものを集約して館内の情報コーナーで展開もしている。

それ以外の舞台鑑賞については、海外からお呼びしたものをお見せする、といったものがどうしても中心になりつつある。

少し特徴的な取り組みとして、82番「アートDEコミュニケーション」。

これは、市内に住む外国籍の方をお呼びして、その方に取材することで外国ならではの文化などに触れつつ、取材の中で特に印象に残ったその方の過去のシーンを演じるという、演劇的な手法も含んだ企画。豊岡市にできた芸術文化観光専門職大学の講師の方をお呼びして展開した企画で、それに関する企画をここ2・3年続けてやっているが、今年度その発展形として、昭和団地放課後クラブというものを立ち上げる。これは10月から実施する予定だが、昭和地区にある児童センターを会場にして、先ほど申し上げた先生をお呼びして、児童センターに来る子どもたちに対して、コミュニケーションワークショップを月1回程度の頻度で実施するという計画になっている。

先ほどからこのような話をしているが、誰かを呼んで舞台上での上演を鑑賞するというような企画は予算がかかるが、こういった講座や所謂アウトリーチのようなものは、参加した方について浸透性の高い効果が期待できるということと、限られた予算の中で無理なく実施できるということが良い点である。今後も多文化共生に関する事業などはこういった活動を中心に組み込んでいこうと考えている。

会 長 : 次に重点施策5「多様な情報発信」について。

戸谷田委員 : 例えば Facebook は、リリオもやっているし文化会館もやっている。SNS で各施設や団体がアカウントをそれぞれ持っている状況であって、知立市の一体となった、集約された情報は果たしてどこにあるのだろうかという議論を連絡会議の中でも話が出た。そういった集約できるような場を作り、各施設のページにリンクで飛べるような仕組みができないかという話があったことを情報共有させていただく。今後は SNS などのウェブ媒体を中心にした展開にシフトしていくであろう。YouTube で公演の予告編を発信するなど。そういったテクニックを自前でなんとかできるような、そのようなことを意識していきたい。LINE については知立市公式ラインアカウントがあるので、それを核にするため文化会館で新たにアカウント作成することは考えていない。1つに集約することで、広く市民に届くのではないかと考えている。

会 長 : 新しいメディアや広報、ネットワークの仕方がどうなっていくのが1番の課題であると感じる。

戸谷田委員 : 先ほど申し上げた、連絡会議で今後取り上げていきたい。

大橋委員 : 思い付きだが、今小中学生たちは1人1台タブレットを持っている。例えばパティオやリリオの企画チラシを子どものタブレットで見られるような仕組みにするといいのかもしれない。内容の情報は精査しながら、子どもの教育にとって問題ないものであればいいと思う。市教委を通して、相談していきたい。

戸谷田委員 : チラシを学校にお配りいただくことや、アンケートをお願いする機会があるが、紙でご用意するとお互い準備や輸送が大変という面もある。それを電子化したものでやり取りできれば、そういったところの省力化も図れるだろう。

会 長 : ぜひ始めてほしい。今日の成果の1つとして。

川上委員 : ちょっとした動画も載せられるといいかもしれない。こんな感じなんだと視覚に訴えかけるもので楽しめるだろう。

会 長 : 行政はサポートをするように。
ここでリリオコンサートホールから資料の補足説明がある。

三宅委員 : 資料2について。利用状況のところ、延入館者数が令和3年度途中からの集計になっているため、それを補足する今年の4月から7月までの数字を説明する。
4月から7月で6,628人。年度をまたぐが、合計年間22,080人ということになる。

戸谷田委員：文化会館は116,000人。コロナ前は200,000人前後で推移していた。

三宅委員：リリオは、リハーサル利用で数名の利用も多い。コロナ前と比べたらもちろん減っているが、以前はリハーサル利用等も少なかったため、一概には言えない。劇的な変更はないが、20,000人～30,000人の間だと思う。

会 長：次の議題（2）ポストコロナ時代を見据えた取り組みについて提案者の永井委員から説明をお願いします。

永井委員：パティオで今、満席を可能とした企画はあるか。

戸谷田委員：客席の前2・3列を開けるのはマストになっている。劇場に対するガイドラインでは、客席の大声の有無で50%か100%かを選択することになっている。いわゆる静かに鑑賞する公演については、100%入れても大丈夫という規制になっている。

永井委員：パティオやリリオもだが、チケット販売をして企画することに関しては、川上委員がおっしゃったように、集客があつてこそその企画ということが言えるはずだ。時代の流れによって新しい感覚を捉えなければいけない中にコロナが1つ加わった。そういったものに関して、これから知立市民はどのように捉えていったらいいのかを課題と感じる。皆さんはどのようにお考えになっているのかをお聞かせ願いたい。

戸谷田委員：動画を配信する機会が増えた。接触を控えなければいけないというところで、アンケートの電子化も取り組んだ。現在、紙と電子アンケートは併用しているが、結果として紙のアンケートの回答率の方が圧倒的に高い。そういった結果を踏まえた上で、足を運ばない方や外出を控えたい方に対してアプローチができるかが課題。将来的にどうなるのかはまだ見通せない。

会 長：YouTubeでも音楽・バレエ・オペラなど、世界的な劇場の配信が増えた。

川上委員：一流のものがオンラインで見ることができるのは嬉しいが、やはり生でしか味わえないものもある。

集客についても、外出を控えている方と気にされない方と二極化しており、声のかけ方に気を使う。様々な事情があり複雑だ。模索していかなければいけない。

永井委員：発想をまず変える。例えばスポーツの場合、私たちの団体がボウリング大会をした際、声援やハイタッチも禁止だった。それでも皆さん楽しんでいて、参加人数は例年より少なかったが、待ち望んでいる人もいたのだと実感した。これからも工夫をしながら企画をしたい。発想がいろいろ生まれてくることが、コロナに対抗していくことだと思う。

もう1つ、予算について。やはり、企画をするには費用がかかる。考えるのは自由だが、実行することにお金がかかるというのがネック。私たち団体の委託料も26年前と同じであり、果たして時代に合っているのだろうか。無い予算の中でどうしていくか、それも含めてアイデア次第だと思う。ウィズコロナに関してめげずに頑張っていきたい。

会 長 :最後に事務局から、その他の説明。

事務局 :副会長から意見があった歴史文化体験教室について。

令和3年度は知立神社の養正館という明治の建物を活用するという事で、その中で絞り染めの体験やピンホールカメラの体験をした。

これは子ども向けというより、古い建物を活用するという方に主眼を置いたものがある。知立市は、歴史的な資源というところで、例えば東海道の宿場町ということがあるが、当時の面影を残す建物が次々と無くなっていくということに危機感を覚えている。文化財の指定まではいかないが、今でも残っている建物をどうにか活用したいという思いがあった。今後は、茶室などを利用して何かやりたいという企画も考えている。皆さんが訪れてもらえるように何か展示をするなどして、知立市の文化を伝えていきたいという構想はあるが、いつどのようにというところまでは進んでいない。従って、現時点では予定なしとした。

会 長 :その他に発言はあるか。

副会長 :「文化芸術推進基本計画」中、様々な施設が記載されている中、図書館が載っていない。私はコロナ禍で読書する時間が増え、活字の面白さに感動する機会が倍増した。そういった意味では、人と人の交流も大切だが、文字を通して得るものもある。こういうことも子どもたちに伝えていくべきではないかと思いはじめた。私は美術をやっているが、モノを見て感じる感性教育をもっと充実させてほしいと常々思っている。こういった逆境の中でも発見があると思うと、基本計画の中に図書館を入れてもよいのではないかと思う。先ほどあった、古いものを再発見・再発掘するなどそういったものも基本計画の1つとして重視してもらえると嬉しい。

5. 閉会